一

明和九年４月下旬、豊後関前城下と関前湾を遠くに望む峠道で三人のあｗ甲斐武士が涼を取っていた。

山は夏の色合いに染められ、浅緑の木立ちの上を吹き抜ける海からの風が、二百六十里の度をしてきた若者たちの旅塵を清めてくれた。

「こうしておると江戸の暮らしが嘘のようじゃな」

河出慎之輔はそう言うと草むらの中に体を投げ出した。

御先手組の組頭を務める慎之輔は二十八歳。代々三百八十石をいただく。ただ一人の妻帯者で、関前には妻の舞が待っていた。

「慎之輔の弱みはズン分に掴んでおるからのう。出世してもおれには無理は申すまい」

小林琴平は二十七歳、舞の兄にあたる。戻れば中気に倒れた父に代わりに、納戸頭として家禄二百五十石を継ぐことが決まっていた。

「琴平、所帯持ちを脅かすのはよくないぞ」

坂崎磐音も同じ二十七歳、中老職六百三十石の長子である。磐音も早晩、父親の後に継がねばならない身だ。

三人は関前城下にある藩の剣道場、神伝一刀流の中戸信継の門下生として幼少の頃より木刀を交え、遊びも学問も共に付き合ってきた仲だ。

二年前、慎之輔が江戸在勤の命を受けた。

その前年には磐音が藩主福坂実高の参勤に伴い、小姓頭として出府していた。

琴平は江戸の藩邸に慎之輔と一緒に姿を見せた。剣術修業の届けを出して、藩から認められたという。

江戸入りが遅れた二人は、磐音の通っていた神田三崎町の直心影流の佐々木玲圓の道場に入門、ふたたび切磋琢磨の日々が戻っていた。

二年の歳月があっという間に過ぎ、江戸勤番や留学を終えた彼らには三人三様の将来が待ち受けていた。

磐音には結婚が控えている。

相手は琴平の末妹の奈緒だ。つまりは舞の妹にあたる。

三人は幼馴染みというだけでなく、小林家の二姉妹を通して縁戚関係が結ばれようとしていた。

「琴平が磐音の妹と一緒にでもなれば、もはやわれらが仲は盤石じゃな」

と慎之輔が琴平をしばしば唆したが、琴平は、

「伊代は、まだねんねではないか。おれのように、吉原は言うに及ばす、品川、新宿、坂橋、千住と、四宿に浮き名を流した者には物足りんな」

と一蹴していた。

「おい、磐音、奈緒に土産は買ったか」

琴平が、青葉の間に淡い紅色を見せる石楠花に茫洋とした眼差しを向けていた友に訊いた。

「ああ、用意した」

「おれから奈緒に渡してもよいぞ」

「奈緒どのにはおれがじかに届ける。いらん世話をするでない」

「いうてくれるわ、居眠り磐音が」

居眠り磐音と最初に呼んだのは、三人の師、中戸信継であった。

「磐音の構えは、春先の縁側で日向ぼっこをしている年寄りの猫のようじゃ。眠っているのか起きているおんか、まるで手応えがない。こちらもつい手を出すのを忘れてしまう。居眠り磐音の居眠り剣法じゃな」

慎之輔の剣は、人柄同様に努力の剣。教えに忠実に、真正面からひた押しに押していく剣技であった。

乱れがない代わりに攻撃の予測がついた。

琴平などは先へ先へと慎之輔の動きを呼んで、散々に翻弄した。

琴平は、慎之輔とは正反対に変幻自在の剣さばきで、対戦した相手が負けを認めるまで容赦のない波状攻撃をつづける。

佐々木玲圓は、

「琴平に謙虚さがそなわれば鬼に金棒じゃがな」

と嘆いた。

その一方で、気が乗らないと投げやりになり、格下の相手から思わぬ反撃を食らうことがあった。

難敵中の難敵は居眠りの磐音だ。

琴平は技量も気力も体力もすべてに勝っていた。が、いつしか居眠り剣法の術中に嵌まってしまう。無理をして仕掛ければ、真綿でくるまれたような防御にあって、根負けする。そのくせ磐音は琴平を負かそうとはしない。いつも引き分けに終わらせた。

「いつの日か、居眠りどのの本物の反撃を見てみたいものじゃ。反撃さえしてくれれば、一撃の下に叩き伏せるのだがな」

琴平は磐音の挑発するが、磐音は誘いには乗らなかった。

江戸を離れる日が迫ったとある昼下がり、佐々木は自ら木刀をとって三人の弟子たちと立ち会った。

磐音は、師匠の攻撃を必死に凌ぎきった。

居眠り剣法は居眠りのままに終わった。いや、反撃に転じる余力など、正直なにも残っていなかった。ただ、師の剣の深さを思い知らされて疲労困憊した。だが、顔はいつもの居眠り磐音の表情に覆われていた。

慎之輔は、玲圓の泰然とした構えに荒い息をあげ、一歩も動けなかった。最後には腰から砕け落ちるように道場の床に座り込んだ。

琴平は、突っ込み、飛び下がり、動き回りながら、間断なき攻撃をつづけた。それも休みなく四半時もだ。だが、師匠はことごとく跳ね返し、かすりもさせなかった。

「木刀を引け、琴平」

と告げた。

同時に琴平の面撃ちが佐々木玲圓を襲った。

佐々木はそれを予測したように踏み込むと、琴平の右手を軽く打った。

くるくると回った木刀が道場の床に落ちた。

佐々木玲圓は三人に呼ぶと、

「関前に戻り、今一度、中戸信継先生の下で修業のし直しじゃ」

と教え諭した。

その場で琴平と磐音には目録が与えられた。

厳しい稽古で知られた佐々木道場の目録は、他の道場の免許皆伝に匹敵すると言われていた。

「琴平、明後日からおまえを兄者と呼ばねばならんと思うと気が重い」

磐音が琴平を見た。

「おれはな、琴平と舞が兄妹であることを忘れておる。そうでもせんと気鬱で仕方がないわ。どうして小林の家からこのようなお調子者が生まれたのであろうな」

慎之輔が笑うと、

「そろそろ参ろうか」

と草むらから体を起こした。

三人の若侍は、関前六万石の城下に向かって、道中の終わりを弾むように歩き出した。

豊後関前の城下外れの一石橋に、三人の帰りを待つ坂崎伊代の姿があった。

「伊代」

磐音は三年ぶりに妹を見て、眩しそうに目を細めた。

伊代はふっくらと丸みをおびて、隠そうとしても隠し切れない若さゆえの輝きを放っていた。だがどこか沈鬱の思いが顔に刷かれているように兄にも慎之輔にも見えた。

「よう分かったな」

「はい、そろそろお帰りの頃だと思いまして」

伊代は兄やその朋輩に頭を下げた。

「磐音、さっきの言葉は取り消す。まさか伊代っぺがこのような美しい女子になっていようとは思いも及ばなかったわ。おれも江戸で土産を買い求めてくるのであったな」

「おまえのような遊び人には、伊代はねんねすぎる。宿場の飯盛り女が似合いじゃ」

「それを言うな、磐音」

三人の若侍は、長旅を無事に終えた緊張から解放されて、最後の上段を言い合った。

伊代を加えた四人は夕暮れの道を城下に急いだ。

「関前に変わりはないか」

兄の問に、伊代がしばしの間を置いて、答えた。

「……格別ありませぬ」

「それはなにより」

「伊代、うちにも変わりないな」

所帯持ちの慎之輔が重ねて訊いた。

「皆様、お健やかにございます」

伊代の返事にはどこか無理を装った響きがあった。

年頃の娘のことだ。慎之輔も磐音も深刻にそのことを考えたわけではない。

「明日からまた関前の暮らししか、退屈じゃな」

琴平が放埒な時代の終わりを告げるように言った。

「いや、やるべきことはたくさんあるぞ」

磐音は慎之輔と琴平の助けを得て、江戸藩邸の若い藩士を集め、関前の硬直した藩政に新風を吹き込む修学会を続けていた。

関前六万石は多額な借財を負っていた。それもこれも藩の重役たちが十年一日の如く藩政を牛耳ってきたつけだ。

藩の改革を実践しようという三人の行く手には、旧弊な考えを持つ藩の幹部たちが待ち受けているのだ。

「磐音、じっくりやらねば大火傷をするぞ」

琴平が応じた。

うーむ、と磐音が頷いた。

「磐音、まずは明後日、そちの祝言の席で会おう」

慎之輔が兄妹に頭を下げた。

江戸から戻った男たちは城の大手門に向かう辻で三方に分かれることになる。

「伊代、今度、おれと会ってくれ。兄者は抜きにしてな」

琴平は本気とも冗談ともつかぬ顔で伊代に言うと、くるりと背中を見せた。

「呆れたました」

伊代が琴平を見送りながら呟いた。

慎之輔も兄妹に挨拶すると屋敷に足を向けた。

四月二十八日の夕暮れのことであった。

残された兄妹も自分の屋敷に足を向けた。

「兄上、お江戸の大火はいかがでございます」

「目を覆う惨状でな、焼けただれた亡骸がどこまでも放置されてあったわ。江戸の中心部を猛火が走り抜けて、南北二つの町に分けてしまった……」

この年の二月二十九日の昼過ぎ、目黒行人坂の大円寺を火元とする火事は、麻布、霞が関

虎の門、日比谷、神田を延焼、さらには日本橋、小川町、駿河町、外神田に移り、下谷、浅草、千住に達した。

いったん火勢は衰えたかに見えたが、翌日には本郷から出火、森川町、追分、駒込、さらには千駄木、根岸に広がった。

死者一万五千余人、行方不明者四千余人、類焼は九百三十四町に及ぶ、未曾有の大火になった。

「江戸城もな、南半分が焼け落ちた。あれを地獄というのであろうな」

磐音たちが勤番任期を終えても関前に戻れなかったのは、大火の大惨事の後始末に追われていたからだ。

「藩のお屋敷はいかがですか」

「中屋敷は焼け落ちたが、幸いなことに上屋敷と抱屋敷は類焼を免れた。大名家の中には、上屋敷も中屋敷もともに被害に追われたところもある。不幸中の幸いというべきであろう」

関前藩では焼け出された中屋敷の者が上屋敷に移ってきて、庭に仮小屋を立てて住んでいる有様であった。

「兄上、江戸はどんなところでございましょうか」

「伊代、なにかあったか」

兄はその問には答えずに訊いた。

「どうしてでございます」

妹は視線を外すと反問した。

「一石橋まで迎えでてくれたからな」

「いえ、それは……」

伊代は首を振って否定した。

家に戻れば事情も知れようと思った磐音は話題を変えた。

「奈緒どのはたまには屋敷に見えられるか」

「ええ、始終、お見えになっては細々と、父上母上はもちろんのこと、私にまで気を遣ってくださいます。伊代とたった三つ違いとは思えないほどにしっかりしたお方です」

「伊代、うまくやれそうか」

妹の心配がそこにあるのではと磐音は訊いた。

「兄上様、ご心配なく。奈緒様は伊代にとって願ってもない相談相手でございます」

「祝言の準備もすべてさせてしまったな」

兄は妹を労った。そして、十一歳も年の離れた妹がどんな悩みを胸に秘めているのか気にかけながら、三年ぶりに屋敷の門を潜った。

その夜、坂崎家では磐音の木国の祝いが賑やかにもよおされた。

慣れ親しんだ家族だけでの団欒はおそらくこの夜が最後であろう。

明後日には磐音の祝言が行われ、奈緒が新しく家族の一員に加わるのだ。

家族水入らずの食事が終わったあと、磐音は父の正睦に書院に呼ばれた。

父は、改めて江戸勤番を労ってくれた。

「江戸家老の篠原どのはなにか申されなかったか」

「いえ、格別には」

「殿に隠居願いを出してある」

「隠居願い？どなたのでございますか」

「わしのものに決まっているではないか」

「父上はまだまだ関前藩に必要なお方、、隠居は早うございます」

正睦は、豊後関前藩六万石の財政立て直しに腕を振るっている最中で、藩主も財務能力を高く評価してくれた。

豊後関前藩は、藩祖が備蓄した準備金を使い果たし、大阪の蔵元に銀二千六百貫（およそ四万二千両）の借財を筆頭に、江戸に札差にも前借り金があった。

借財の総額は関前の実収の三年分の蔵米にあたった。

藩士はすべて三分の一のお借り上げ米の措置をとらされていた。だが、そんな消極策ではもうどうにもならないところまできていた。

正睦はまず、これまでばらばらに売っていた自藩の産物、干し海鼠、干鮑、干鰯、判紙、椎茸などを一手に藩の物産所に集荷させ、それを借り上げ上げ弁才船で上方や江戸に直接運んで利益をあげる、独占的な流通機構を考えだし、軌道に載せたところだ。

それで関前はんが大阪の蔵元に借りている二千六百貫は、およそ十年で返却する見通しが立った。

「お前ももはや独り者ではなくなる。これからは坂崎家の実質的な当主として働いてもらわねばならぬ。そのために三年の江戸勤番があった」

江戸に出府する前、正睦は磐音に命じた。

「磐音、お前の江戸在勤の目的は、偏に、徳川幕藩体制下で六万石の外様大名が生き残る途を探ることじゃ。戦國の世が終わって既に百五十余年、世の中を動かしている者は将軍でも大名でもない。江戸と上方の商人たちがこの世を支配しておる。剣でも槍でもなく、金が社会を動かしておる。剣に没頭するのもよい。が、江戸に参ったら蔵前の札差や商人たちとも広く交わり、彼らから藩運営を学んで参れ」

磐音は、そのとき、父の言葉に反発を覚えたものだ。

武士の表芸はあくまで剣であり、算盤ではないと考えていたからだ。

だが、江戸に出て、豪商たちがいかに金と物を武器に大名諸侯を牛耳っているか。その実態に接したとき、父の先見の明にうたれたものだった。

磐音は父の始めた藩事業をさらに発展させるべく、積極的に札差や廻船問屋たちと交わってきた。

国許に戻り、江戸での修学会の成果を関前で実践に移す。そのためには若い藩士や商人や百姓たちを広く集めて、力を借りようと考えていた。

このことは慎之輔と琴平の理解を得ている。